

## 野守の池

今からおよそ七百年も前のお話です。

京の都の建仁寺に、疎石という若い僧がおりました。後の夢窓国師のことです。

疎石は學問がすぐれていましたが、顔立ちもひときわりっぱでした。男らしくりりしいまゆ、清くすんだ目、色は白く、鼻すじが通り、誰が見てもほればれするような、青年の僧でした。ですから、疎石が町へた

くはつに出ると、都の若い女人たちは、ひと目でも疎石の姿を見たいと、それはそれは大変なさわぎでした。

その中でも、「野守太夫」は特別に熱心でした。色白で美しい顔立ちの野守は、

「なんてりっぱなお方でしょう。私はどんなことをしても、あの方のお嫁さんになりたい。」

と、言っていました。そして何度も何度も、疎石のいるお寺へ行つては「どうか私をお嫁さんにしてください。」とたのみました。

しかし、そのころのお坊さんは、妻帯することが許されておりませんでした。でも野守は決してあきらめようとはしませんでした。雨の日も風の日も、毎日毎日山門をたたき

「どうぞ疎石さまに会わせてください。一生のおねがいでございます。」と、たのみ続けました。

——疎石はほとほと困ってしまいました。——

もうこれ以上、寺にめいわくをかけることはできない。私は仏に仕える身だ。いつまでも、こんなことにかかわっていたのでは、大切な修行も、思うようにはできない。そうだ、このさい京をはなれ、広く國中をまわって、見聞をひろめてこよう。

こう決心した疎石は、弟子の了玄を連れて、ひそかに旅に出かけました。二人は東海道を下って、金谷の宿に着きました。美しい流れの大井川をながめていた疎石は、遠くかすむ北の山々に目をうつし、ふと家山の里のことを思い出しました。

「私は小さなころ、甲州のお寺にあずけられたことがあった。そこから京都へ帰る途中、家山の里へ寄ったことがある。あそこには、山の縁にかこまれた小さな美しい池があった。それに土地の人たちは、人懐に厚く、いい人ばかりだった。そうだ、了玄よ。これから家山の里へ行ってみよう。」

こうして二人は家山に足を向けたのです。

家山に着くと、うれしいことに村人は疎石たちを、あたたかく迎えてくれました。

「よくきてくださった。住まいの方は、わしらがめんどろ見ますに、どうか村のしゅうのため、いろいろ教えてくだされ。」

と、言って村人たちは、二人のお坊さんのために、池の畔に広い境内をもつ、本堂は間口九間奥行七間、それにつりがね堂もそなえている、りっぱな寺を建てて、寺の名を海寿山聖福寺と名づけました。

疎石は大へん喜んで寺に入り池の景色をながめました。池は緑の山のかげを映し、それはそれは、美しいながめでした。そのころ池は二つに分かれていました。本池と小池です。小池は天王山の北側にあつて、この二つの池は小さな川でつながっていました。天王山には、たくさん杉やひのきが、うっそうと茂つて、ちようど古ふんのような形をして、静かに眠っていました。池の波はゆったりと岸辺に寄せては返し、あたかも永遠の神秘をたたえているような感じさせました。それからというもの疎石は、毎日寺にこもつて一心にお経を唱えました。

ある日のことです。聖福寺の門を、とんとんとたたいている、若い旅の女の人がありました。

「私に、女の人だと、はて、どなたであろう。了玄、名前をうかがつてきなさい。」

了玄が外へ出ていった後、疎石は立上り、障子を開けて、山門の方を見ると、

「あつ。」

とおどろきました。なんと女の方は、忘れようとしていた野守だったのです。

野守は疎石が急に行方知れずになったことを知ると、いつそう恋しくなつて、

「疎石様は、一体どこに行かれたのでしよう。」  
と、必死になつて、八方手をつし、疎石の消息をたずねていました。

そして、疎石がどうやら東の方をさして旅に出たことを知ると、あちらのお寺こちらのお寺とたずねながら、とうとう家山の聖福寺にたどりついたのです。

了玄から野守のことを聞いた疎石は、しばらくじっと考えていましたが、ほどなく頭を上げて

「野守は女の身で、よくぞ京からたずねて来たものだ。さぞなんぎなことであったろう。せつかく来たのだから会ってやりたいが、私は仏に仕える身である。それにだいいじな修行もある。ここは心を鬼おににして、いないことにしよう。」

そこで了玄は、

「あなたのような僧は、この寺にはおりません。何かのまちがいでしょう。」

という

「いいえ、そんなはずはありません。疎石様は、このお寺に確たかにいらっしゃるはずです。ひと目だけでけっこうですから、どうぞ会わせてください。一生のおねがいでございます。」

野守は旅につぐ旅で髪かみはよごれ、顔はやつれていましたが、愁うれいを舍すんだ目、色白のととのった顔立ちは、以前いぜんの美しさをうかがうことができず、その様子を見て了玄は、ふびんに思いましたが、師しのいいつけにそむくわけにはいきません。

「さきほど申もうしたが、そのようなお方は、この寺にはおりません。ほかの寺をさがしてみなさい。もう日が暮くれるから早く帰りさなさい。」  
そういって門を固かたくしめてしまいました。



次の日も、またその次の日も、野守はつかれきった体を、ひきずるようにして、寺の門をたたきました。何日かすぎたある日の夕暮れ

「どうか疎石様に会わせてください。おねがいします。私のねがいを聞いてください。」

了玄は、ことわっても、ことわっても必死ひっしになって訪れる野守の姿に、あわれを感じずにはいられませんでした。

「何度も申したように疎石様は、この寺にはおられません。はるばる京の都から訪ねてこられて、さぞ力を落とされたことであろう。

たとえ、あなたがどこまで訪ねて行かれても、修行の身であり、僧侶そうりよである疎石様は、あなたを妻つまとしてむかえることはできないのだから、どうかあきらめて、京きょうに戻り幸せに暮らしてください。」

了玄のことばを聞いているうちに、野守は自分の望みが、とうていかなえられないことが次第にわかってきました。悲しみの涙が、はらはらと流れてくるのをどうすることもできませんでした。

「そろそろ月も昇り始めた。夜つゆがからだにさわるだろう。気をつけて早く帰るがよい。」

了玄は、悲しみにくれる野守を見つめていると心が痛みましたが、気を取り戻して、山門の扉を静かに閉じました。

暮れていく木立のかげで、懇々と論ずる了玄と、涙にくれる野守のあわれな姿を、じっと見つめていた疎石は、僧侶の身とはいえ、人間として苦しまずにはいられませんでした。

とぼとぼと去って行く野守の後ろ姿に疎石は、いつまでも合掌して立ち尽くしておりました。

山門を離れた野守は、――

今さら京へ帰る気力もなく、張りつめていた心もゆるんで、池のほとりをとぼとぼと歩いていました。髪を乱し、肩を落として歩く野守の姿を、月の光がいつそうあやしく美しく照らしていました。

「いとしい疎石様、ごめいわくをおかけしました。どうぞお許しください。さようなら。」

野守は、そでのたもとに石を入れると、静かに池に入って行きました。

野守には、空にかかる月が、あたかも自分を手招きしているように思えました。

やがて野守の姿は、池の中へ消え去りました。月は何事もなかったように、その淡い光を池に注いでいました。



あくる朝、野守の死体は池に浮かびました。それを聞いた疎石は、じっと天をみつめていましたが、やがて静かにつぶやきました。

「かわいそうな女よ。この私を慕うがゆえに、たった一つしかない尊い命を捨ててしまった。私とて、決してお前をきらいなわけではなかったのだ。思えばあわれな女であることよ。許してくれ。野守よ。」

疎石は、野守の遺体に向って合掌しました。そしてなきがらをていねいに葬りました。

村人たちは、それからこの池を「野守の池」と呼ぶようになりました。